

じられたことがあったため（墓碑が乱立し景観を削ぐという理由から）、碑を石板に変えて棺のそばに埋めた。これが「墓誌」。

高貞碑は、南北朝時代（北魏が華北を統一した439年から始まり、隋が中国を再び統一する589年までの中国の南北に王朝が並立していた時期）の北魏（386年～534年）の時期の523年に建てられた高級貴族の墓碑。内容は被葬者の高貞の系譜、生前の業績、建碑の事情を記す。撰文者・筆者については記載がないが、皇室の外戚になる名門であるため、当時一流の能書家を書いたと推測される。被葬者・高貞の墓の荒廃とともに土中に埋もれ、長くその存在を知られずにいたが、清の乾隆年間末期（1790年代末）に德州で出土、世に現れた。戦後、文化大革命の被害により真つ二つに破壊されたが、その後補修され山東省徳県の孔子廟に保存されている。碑の大きさは232×91cm、碑文は楷書で1行46字、全24行にわたる。篆額は陽文（文字が浮き出る刻し方、陽刻。反対に文字を刻すのが陰文、または陰刻）で「魏故營州刺史懿侯高君之碑」と刻されている。中央三行は戦後文化大革命による文化財破壊に遭って家の敷石にされた際に失われた。現在この部分はコンクリートでつなげただけで文字は復元されていない。書風は北朝時代急速に発展を遂げたいわゆる「六朝楷書」と呼ばれる独特の楷書体による。六朝楷書の多くは「方筆」と呼ばれる角ばった運筆法によっている（円筆といわれる「鄭義下碑」も骨格は方筆）。

国で1966年から1976年まで続いた中国共産党中央委員会主席毛沢東主導による文化運動。名目は「封建的文化、資本主義文化を批判し、新しく社会主義文化を創生しよう」という文化の改革運動だったが、実際は大躍進政策の失敗によって国家主席の地位を劉少奇党副主席に譲った毛沢東が自身の復権を画策し、学生運動や大衆を扇動して政敵を攻撃させ、失脚に追い込むための官製暴動であり権力闘争だった。

《用筆解説》高貞碑…文字がほぼ正方形に収まるよう点画の組み立てが緊密、偏と旁が互いの空間（余白）に対して無駄なく緻密かつ精妙に入り込んでおり、それが絶妙な間の取り方をしている。起筆は鋭く↓送筆は①切れ味よく引く時と、②なめらかに、のびやかに引く時とある。次にその例を示す。

【補足】清代初期における北朝の墓碑・墓誌の大量出土は、それまで完全に忘れ去られていた北朝の「六朝楷書」の存在を知らしめ、そのレベルの高さに多くの研究者・書家が驚嘆し、六朝楷書の研究が急速に進んだ。その中で出土した「高貞碑」は、その暢達と緊密を両立させた見事な書風から六朝楷書の書蹟中の白眉とされることになり、拓本が採られるとともに多くの書家によって臨書が行われるようになった。【墓碑と墓誌銘】「墓碑」は、故人を顕彰するため墓のそばに姓名・生前の業績・記念文を記して建てたもの。だが中国では一時期建碑が禁

功
降
茲
濟

収筆は楷書特有の「突き押さえ」はほとんどなく、軽く止めてゆっくり引き抜く収め方が主体。参考まで左に高貞碑の「一」と他の楷書体の「一」を示す。

北魏 高貞碑

北魏 孫秋生造像記

北魏 始平公造像記

唐 欧陽詢 九成宮醴泉銘

「高貞碑」

※書人会のホームページで私の臨書動画をご覧くださいいただけます。

尾形 澄神

左の籠字は、同じ文字を高貞碑法帖から探し、あるいは大書源を引き同時代の他の古典の文字を参考に私の判断で行った。



有
大
功
於
天
下
位



為
太
師
俾
侯
齊
國



世
世
勿
絶
表
乎
東



世



继
及

臨書作品の落款は〇〇臨と書きましょう。

これは学ばせていただきましたという古典・古筆に対する恩恵の念を表す意味もあります。

加藤翠柳論考集28～32頁には

「臨書は写生にして臨画にあらず」

「臨書は生を写すこと」

とあります。この言葉を胸に刻み古典・古筆と向き合ひましょう。



海其公族高子者即



其氏焉自茲已降冠冕

同じ六朝楷書の張猛龍碑（522年）は俊敏な感じを受けるが、線の暢達さは高貞碑には及ばない気がする。

高貞碑の起筆↓送筆↓収筆の一連の運筆を、私は鄭義下碑（511年）と相似性があると感じている。

鄭義下碑は円筆の楷書と言われるが実際は方筆の意が強い。普通の画仙紙に書かれていたなら、字形こそ違えど線條の趣きは高貞碑みたいな感じになっていたのではないかと？というのが個人的見解である。鄭道昭も北魏の人である。高貞碑のもう一つの特徴は、方形の中に収まるように緊密に偏と旁が入り込んでいる文字が多いこと。非常に理知的な結体と思う。